

南の風 431

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

前号から随分時間が経ちました。よろしければ、430号をもう一度ご覧になってください。

- ・指導者が、選手の学びの機会を創出するファシリテーター（サポート役、誘導役または潤滑油）であるのなら、その学びの機会を享受する選手は活動の主体、つまり選手が主語であるべきだ。

(2) 「教えないスキル」の核となるもの

- ・「教えないスキル」とは、指導者が「何も言わない」、「教えない」ことか？
- ・「教える」は、指導者が主語。一方の「学ぶ」は選手が主語。指導者はあくまで環境の一部と言える。
- ・手取り足取り教える代わりに、選手が心地よく学べる環境を用意し、学習効果を高める工夫をする。
- ・「教え方がうまい」といった指導スキルではなく、選手が学べる環境をつくることが育成の生命線ではないか。
- ・一方的なコーチングをせずに、問い合わせをつくる。選手たちが「学びたい」と自然に意欲がわくような環境を整備する。
- ・伸ばしたい相手を主語にする。→ 誰しもがその相手のために心地よい学びをつくろうとする。誰しもが工夫し始める。
- ・心地よく、かつ失敗できる環境を提供することこそが、選手にとっての学びのチャンスとなる。→ 指導者の一方的な教え込みのリスクに対し警鐘を鳴らす。

VII 認知力を育てる

(1) 認知力を高めることで

- ・「認知力」（コグニティブスキル）とは、時間、空間、スピード、変化、シチュエーションなど、ゲームにおける不確定要素を認知する力。
- ・タイミングの良いパスワークや、味方のためにスペースをつくる動きなどの「クリエイティブなプレー」なども、認知力がベースになっている。
- ・スペイン人同様、体格に劣る日本が指向するバスケットボールスタイルは「ビジャレアルメソッド」が向いているのではないか？
- ・日本人のディスアドバンテージである高さ、強さ、体格を磨かなくても、脳内思考のスピード、プレーや動きの質の高さ、しなやかさを身につければいい。

(2) 「頑張る文化」から「創造する文化」へ

日本には、頑張らせる指導（教育）はあるけれど、自ら考えて創造したり、自分で判断できる力を養う指導（教育）がなさすぎる。《JBAの理事 守屋 志保氏の言葉》

次号に続けます。